

氏名（本籍）	ヤマ グチ	イサオ	山口 功（東京都）
学位の種類	博士	（美術）	
学位記番号	博美	第358号	
学位授与年月日	平成24年	3月26日	
学位論文等題目	〈論文〉 分解と拡散－現代社会の記号化・象徴化－ 〈作品〉 分解と拡散		
論文等審査委員			
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部） 坂口 寛 敏
（論文第1副査）	〃	〃	（ 〃 ） 佐藤 道 信
（作品第1副査）	〃	講師	（ 〃 ） 齋藤 芽 生
（副査）	〃	准教授	（ 〃 ） O J U N

（論文内容の要旨）

本論文では記号的・象徴的な表現手法と、制作のテーマとしている現代社会の側面を考察しつつ、自作品を解説した。

本論文は三章から構成される。第一章では、まず記号と象徴の違いについて述べた。対象との関係において、記号が双方向的な関係を持つのに対し、象徴は一方向な関係持つものとする。その上で記号的・象徴的な表現手法を用いることで、どのような効果を得ることができるか、また、どのような調節を行なうことができるかを、実例を挙げて解説した。本論では、記号的・象徴的な表現手法において三つの基準（機能）を設定している。一つ目は、対象を簡潔に言い切るために、無駄な要素を省く機能であり、いかにすっきり見せるかという視点である。この代表的な例に建築図面などが挙げられる。建築図面は建物を建てるのに必要な要素を記号的に表し、それ以外は排除しているのである。二つ目は、社会的に受け入れがたいテーマや描写を和らげ、受け入れられやすいものにする機能である。例えば、殺人の場面などを表現する場合、写実的に行なうと衝撃的であるが、障子に血が飛び散るシーンで表すなど、記号的あるいは象徴的に表現することで、受け入れやすさを調節することができる。三つ目は、意外性のある象徴化をすることで、面白みを出すことができる機能である。例えば、お札を燃やして灯りをとる「成金」の風刺画には、灯りを取ってくるよりも、ポケットに入っているお札を燃やす方が手っ取り早いという認識が窺える。ここではお札に対する常識が覆され、成金の羽振りのよさを象徴しており、意外性のある面白みがある。

第二章では自作品において、現代社会のどのような側面が記号的・象徴的に表現されているかを解説した。第一節では、食文化の変容をモチーフとした作品《レンコンに穴を空ける機械》をとり上げた。第二節では、多くの機能が一つの機器に集約される傾向があることをモチーフにした作品《多機能》、第三節では、薬の力で精神的な病理を改善することをモチーフとした《躁鬱ダイヤル》、第四節では、文化が多層化して仲のよい人であっても共通の知識がまったく異なる現象をモチーフとした作品《無限1up》を取り上げる。第五節では、かつてのヒエラルキーの崩壊と、物理的な場所の制約がなくなった社会を誇張して表した作品《ホームレスオフィス》を挙げ、第六節では、媒体の変化がコミュニケーションにどのような影響を与えるか、それを考えるきっかけを提示した作品《ラブレター特論》、第七節では、お金と友情の付かず離れずの関係を記号的に提示した《友情販売機》、第八節では、身体と機械の狭間に生じる摩擦や制約をモチーフとした作品《超小型携帯電話》と《16又マウス》をとり上げた。

第三章では提出作品である《分解と拡散》と《方舟》について述べ、モチーフとしている現代人の身体感覚の変容について言及した。現代人が新たに得た身体感覚は、「心身の分解」と「仮想空間への拡散」である。

医療技術の進歩等により、人間の体は部品として意識されるようになった。もちろんその進歩の行く手を阻む課題は数多くあるが、現代人は「心臓に致命的な欠陥があっても、人工臓器や移植で改善させることができる」のである。また、自分の容姿をよりよくするために、美容整形の手術を受ける人も増え、そのような行為に対して差別的な意識を持つことは、今やほとんどなくなりつつある。また、人間の思考や感情も科学的に解明されようとしており、一般にも注目されている。人間の心身がバラバラに分解されているという意識を生み出すだろう。

一方、現代人は仮想空間への拡散という、新たな身体感覚を持つようになった。インターネットの存在感が大きくなり、携帯端末が普及したことで、仮想空間という新たな領域が現代社会の前提として存在することになった。これは、今まで物理的な空間のみで生活していた人類にとっては新しい領域であり、常に持ち歩いている携帯端末からアクセス可能ということは、自分の腕を伸ばせば即座に物理的な空間を飛び越え、距離も重さも存在しない仮想空間に入ることができることを意味する。我々は、今日それを当然のこととして、仮想空間に拡散していく身体感覚として捉えることができる。

このような「心身の分解」と「仮想空間への拡散」を自作品《分解と拡散》《方舟》でどのように記号的・象徴的に表しているかを解説した。

終章では本論で論じたことのまとめと、私が作品を社会の中でどのように提示しようとしているのかについて考察した。最後にどのように鑑賞者に作品を受け止めてもらいたいのかについても述べた。